

老健 ほっかいどう

VOL.7

2020年1月

一般社団法人北海道老人保健施設協議会

第1特集

いざ新時代『令和』老健の幕開け ～地域の安心と信頼はここにあり～

第27回 北海道老人保健施設大会

第2特集

老健における医療重度者 対応をどう進めるか

北海道北見市
樹氷

施設紹介 「いきいき」「緑風」

道老健の広がるつながる輪

看護介護委員会

連載 第2回 研修地の魅力探訪 ～札幌編①～

～医療と介護でまちづくりを～

一般社団法人 北海道老人保健施設協議会 幹事
医療法人秀友会 介護老人保健施設 愛里苑 理事長

藤原 秀俊



北海道老人保健施設協議会幹事を2012年から仰せついています老人保健施設愛里苑の藤原と申します。

介護保険制度が創設された当時の、医療と介護は別物という考え方から、徐々に医療と介護をひとつくりにして考えなければ、時代の趨勢について行けなくなって来ています。18年度の診療報酬・介護報酬同時改定により、ますますその傾向が強くなっています。

この度の介護報酬改定では、介護老人保健施設に関しては、在宅復帰・在宅支援が強調され、老人保健施設は5類型（超強化型・在宅強化型・加算型・基本型・その他）に分類され、基本型やその他では経営が立ち行かなくなって来ました。老人保健施設は否応なく、在宅重視せざるを得なくなってきています。そもそも老人保健施設は中間施設として位置付けられ、医療機関と在宅との橋渡しをする施設であった訳ですが、それが報酬と言う鞭で強引に進められてきたことになった訳です。医療においては、「時々入院、ほぼ在宅」という考え方ですが、施設では「時々入所、ほぼ在宅」の形が出来つつあります。

医療界では、地域医療構想が出され、医療機関は「高度急性期・急性期・回復期・慢性期」と分類され、それぞ

れの役割を分担すべく、圏域の調整会議において、調整が進んでいます。さらに高度急性期以外は全て慢性期と言う日本慢性期医療協会の先生もいらっしゃいます。医療の中では、少しずつ機能の垣根がなくなりつつあります。

日本社会全体として、現在直面している問題は少子高齢社会にあります。介護人材不足と言われていますが、全ての分野で人材と言うより、人手不足になっています。介護分野においては、介護職に手当が出ていますが、同じ職種でも医療分野の介護職には手当はありません。そこで賃金の格差が生じております。介護分野における介護職の環境は、現在整備されつつあります。人手不足の解消のために、外国人や介護ロボットの導入が求められ、今後対策を講じていく必要があります。

現在老人保健施設をはじめ、医療や介護に求められているのは、まちづくりです。本来これは行政の役割ですが、残念ながら一部の行政にはその能力がありません。これは我々が中心になって、ぜひ進めて行かなければなりません。

医療・介護に携わる全ての人たちが一致団結してまちづくりをしましょう。

Information

2019年度は、函館で職員研修会を行ったほか、帯広で3年未満の職員を対象とした基礎研修も開催しました。たくさんの方にご参加いただき、ありがとうございました。2020年度も皆様のご参加をお待ちしています！

▶大勢の参加者が集まった函館の職員研修会



▲帯広の基礎研修で交流を深めた参加者の皆さん

「いざ新時代『令和』老健の幕開け」 ＜第27回＞ ～地域の安心と信頼はここにあり～ 北海道老人保健施設大会

2019年10月25・26日に、第27回北海道老人保健施設大会が開催され、全道各地から88施設480人の会員が訪れ、充実のプログラムを通じて研鑽を図りました。

開会式 開会挨拶



▲星野会長

北海道命名から150年で、令和という新しい時代で迎える今大会。『ときどき入所、ほぼ在宅』が定着しつつあるなか、医療と介護の機能をあわせ持ち、リハビリや認知症対応も行う老健は、一層大事な役割を果たしていく施設になるでしょう。人生100年時代においては老後の時間の過ごし方が変化し、ケアの質も問われる時代です。地域の安心と信頼を支える老健となれるよう本大会が足がかりになればと願っています！



開会式では、全老健の東会長の来賓挨拶として本間達也副会長が祝辞を代読。「医療と介護の橋渡し役となり、国や国民が期待する老健になる」と呼びかけました。このほか、北海道社会貢献賞として、功労者の表彰式が行われました。



プログラム

【1日目・10月25日】
▶開会式 ▶基調講演
▶分科会 ▶懇親会

【2日目・10月26日】
▶特別講演 ▶分科会 ▶閉会式

基調講演

「地域の安心と信頼はここにあり
～これからの介護・福祉の仕事を考える～」
山崎 亮氏 (studio-L代表・コミュニティデザイナー・社会福祉士)

カリスマ介護士が活躍する老健に！

公園設計など地域づくりを手がけるコミュニティデザイナーとして大事にしているのは、地域の人たちの話を聞くこと。『私が公園をデザインした』という意識が地域住民に醸成され、ロイヤルティにつながるためです。老健も同様で、老健は理事長や職員のものという意識を捨てない限り、地域包括ケアシステムは実現できません。老健を、不特定多数の人が出入りできるような“まち化”することで、自然と複数の目によって入所者の見守りやおしゃべりなどの介護の周辺業務が担われるようになり、介護士はプロの仕事に専念できるのではないのでしょうか。介護士がキャビンアテンダントのような憧れの職業になり、「カリスマ介護士」がすすめるベッドや食事がヒットするといった現象が起こる可能性だってあり得る。小さなことから変革し、地域の人と手を携えて取り組んでいくことを期待しています。



▲ユニークな事例をたくさん披露した山崎氏

特別講演

「冬の停電を想定内とする令和型減災
～自らのちを護り、多職種連携を活かす～」
根本 昌宏氏 (日本赤十字北海道看護大学看護薬理学領域 教授)

時代に即した減災対策へ踏み出すとき

日本は4枚のプレート上にある火山国であるため、天災は起こってしかるべきで、大事なものは天災をやり過ごせる力を養うことです。しかし、地域を守る世代が減少し、守られる世代が増加するなか、災害関連死の増加は危惧されています。2016年に起こった熊本地震でも多くの震災関連死、災害関連疾患が多発しました。そこで、これからの減災対策には、高齢者や障害者等の要配慮者に平時からどうアプローチをかけるか、あるいは介護の専門性を踏まえた冬対策の訓練が求められます。命を守るために、自分自身の安全・健康を担保し、女性の支援に重きをおいた地域づくりも必要です。我慢と根性を強いていた“昭和型防災”から健康を守る“令和型防災”へのシフトが求められる今、地域における自助、共助、公助の輪が広がることを願っています。



▲避難所の環境改善に声をあげる根本氏



分科会
9分科会
47演題が発表

認知症ケア	ケアおよび生活リハ	ケア全般
業務管理・人材マネジメント	ケアおよび医療的ケア	業務改善
通所リハ	地域連携・個別支援	在宅支援・在宅復帰

老健における医療重度者対応をどう進めるか



◀左から西田さん、笹田さん、根布谷さん

幅広い疾患を抱える医療重度者を迅速かつ手厚いケアで支援

社会医療法人禎心会
介護老人保健施設ら・ぱーす

DATA

- 開設/2005年5月
- 加算型
- 単独型
- 入所80名/通所75名

慢性期医療や在宅療養患者の急変時の受け皿機能を発揮

「ら・ぱーす」では80名の入所者とショートステイを含め、常時、医療重度者を受け入れています。内訳は、胃ろうや喀痰吸引、インスリン、尿道カテーテル、看取りなど。過去には、酸素吸入療法や腎ろう、ストーマといったケースの受け入れ実績もあります。

重度者の受け入れは2005年の開設当初から一貫して力を入れています。背景には、脳神経外科を中心とした急性期病院を主体とする法人のなかで、慢性期医療や在宅療養患者のSOS時等の受け皿としての機能を果たす使命を同施設が求められてきたことがあります。「当法人は介護保険制度が始まる前から在宅支援に目を向けていました。脳卒中などの後遺症を残して在宅で生活している患者さんが高齢化し、日常生活に支障が生じるような症状が表れはじめたことで、当施設を利用するパターンも増えてきました」と事務長の根布谷厚志さん。看護師で療養長の笹田洋子さんも、「『ずっと禎心会で診てほしい』と望まれる方も多く、当たり前のように医療重度者の対応を行ってきたため、職員の抵抗感ありません」と話します。

管理や処置の負担がかかる医療重度者を、同施設が長く幅広く受け入れられている要因は、大きく分けて2つあります。1つめは、適正な受け入れ人数をキープすることで、例えば胃ろうの入所者は1割程度に

設定しています。「出来る限りお受けしたいのは山々ですが、キャパシティを超えてしまえば、現場が疲弊して続きません。そのため、医療重度者は人員が少なくなる夜間でも看護師1名が対応し得る入数を基準としています」と笹田さん。支援相談員の西田夕子さんは、「相談があれば、まずは現場と協議することはもちろん、時には現場にも赴いて実態を目で見て確認し、受け入れが可能かどうかを検討しています」と説明します。

早期発見・早期治療の徹底で急変患者を出さない仕組み

2つめは、不安定な病状にある入所者への毎日のケアの徹底です。早期発見・早期治療をスローガンに、ユニットケアの特性を生かしながら看護と介護が連携し、急変患者が出ないような体制を構築。少しでも体調不良と見受けられれば、施設長が主体となり、必要があれば点滴や抗生剤の投与等の治療を行い、出来る限り、重症化しないよう対処しています。また、医療機関を受診する際は人員配置をやりくりして送迎や同行をするほか、急変症状が起こったために、日頃から同法人病院とのパイプを構築し、救急搬送できる体制を整えておくことも欠かせません。

あわせて、これらの取り組みが空床対策としての意識向上にもつながっているという同施設。「入院となって1週間以上ベッド

が空いてしまえば、経営的に大きな損失になります。それよりも、施設長の指示のもと、所定疾患施設療養費を算定した治療のほか、多少施設の持ち出しとなっても早期からの薬剤投与を選択します。早期受診を重視し、とにかく入院させない、空床を抑えることに力をいれています」と笹田さん。

2019年度からは、入所判定会議以外に週1回のベッド運用会議もスタート。施設長を中心に根布谷さん、笹田さん、西田さん、介護係長が集まり、現状把握と議論を交わしています。もちろんその場で医療重度者の受け入れについて話し合うことも多いといいます。「受け入れるうえでの確認事項等について多職種の助言ももらえることで、相談を受けてからより円滑な対応ができるようになりました」(西田さん)

現在も、さまざまな重度者受け入れの相談が寄せられる同施設。「オールマイティである老健の役割を発揮できるよう、体制を整えていきたいですね」(笹田さん)



▲入所カンファレンスで医療重度者対応も検討

- ☑ 相談課と現場の逐一の話し合いに加え、ベッド運用会議にて多職種で議論する
- ☑ 夜間でも看護師が対応できるよう受け入れ人数を調整する
- ☑ 多少のコストがかかっても早期発見・早期治療を優先し、急変患者を出さない

ら・ぱーす流
医療重度対応者を
受け入れるポイント

老健における在宅復帰・在宅療養支援等指標では、喀痰吸引や経管栄養の実施割合を求める項目が設定されるとともに、看取りへの対応も期待されるなど、医療ニーズへの適切な対応がより求められています。老健としてどのような体制を整え、取り組んでいくか、2施設の事例から考えます。



▶「『良い人生だった』と思えるような最期を支援できれば冥利につきます」と塚本さん

本人・家族との小まめな情報共有で開設当初から看取りを推進

医療法人東札幌病院
厚別老人保健施設ディ・グリューネン

DATA

- 開設/1994年10月
- 超強化型
- 単独型
- 入所100名/通所70名

苦痛のない最期のため全入所者にACPを確認

ホスピスケアの先駆的病院として知られる東札幌病院を母体とするディ・グリューネンは開設当初から看取りに意欲的に取り組んでいます。毎月1〜3名、多いときは年間20名近くの入所者を見送ることもあります。

同施設における看取り対応は入所時から開始されます。入所が決まった段階で「利用時リスク説明書」と一緒に渡しているのが「終末期における本人の意思に関する書式」。つまりはアドバンス・ケア・プランニングとなる延命治療や療養場所等の確認をしているのです。これについて看護・介護副部長の塚本春美さんは、「入所者の多くがリハビリを目的としていますが、やはり近年では100歳を超える高齢者の受け入れも増加し、そのときは元気でもいつ体調が変わるか予測がつかないため、すべての入所者に意思確認が必要だと考えています」と説明します。

看取りの対象者がした場合、まず着手するのは、「看取りプラン」へのケアプランの変更です。本人確認をしたうえで、毎日のカンファレンスを通じ、例えばリハビリは快刺激を中心としたものや安楽なポジショニングを重視する、食事面では補助食品も取り入れながら食べやすいムース食を選択するなど、多職種の視点を盛り込みながら「苦痛がないこと」を前提としたプランニングに

変更。家族に対しても、その時点で、老健における看取りとはどのようなものか、可能な医療行為や身体的変化について文書ともに説明をしています。

看取りがプロ意識を高める機会に覚悟をもって取り組みたい

そこから看取りまでの期間は、とにかく本人と家族との緊密な情報共有に注力するという同施設。R4システムを基盤とした情報共有のほか、データだけでは表せないような本人・家族から得た情報を独自の「支援経過記録」としてまとめています。「職員からの質問にどう回答したかを詳細に記録し、やり取りのニュアンスやご家族の心情まで把握できるようにしています」と塚本さん。

看取り対象者の資料は、この支援経過記録を一番上に、一人ひとり意思表示シート等の資料とまとめてワンセットにし、最新状況を誰もがいつでも確認できる状態にしています。

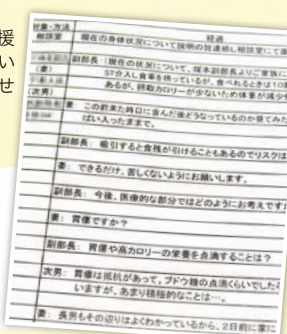
一方、家族への情報提供としては、インシデントを含めた報告事項があれば、職種関係なく最初に気付いた職員が家族に連絡する仕組みにしています。これは、看取りは多職種によって成立するという同施設の方針にもとづいており、これにより専門性も磨かれると塚本さんは強調します。「限られた時間のなかで能動的に動くことができるよう、普段から『セラピストとしてどう思う?』『管理栄養士としてどう対処す

る?』と、上司から部下へ問いかけを繰り返すことでプロとしての意識を養っています。研修も大事ですが、実践から学ぶことのほうが多いですね」

看取り後のデスクカンファレンスでも、次への改善点を話し合い、多職種でのスキルアップを図っています。家族からは、「薬も最小限で、ラクに逝かせてあげられてよかった」と同施設での看取りに納得する言葉をかけられることが多く、それが職員の励みになっているといいます。

老健にとっての看取りは、「職員・施設長の覚悟がすべて」と塚本さんは指摘します。「『食べないから点滴をしたい』『苦しうだから酸素吸入をしたい』と言うのは、大体家族ではなく不安を覚える職員側です。当施設では、夜中に心肺停止となっても看護師が対応し適切にお看取りできれば、医師を呼ぶのは朝一でもいいというルールにしており、それは当然ご家族の了承もいただいています。ルールさえ確立しておけば、医師のオンコール体制といった看取りへの障壁も1つなくなるでしょう。覚悟を持って体制を構築し、これからは『高齢者こそがホスピスケアの対象者』という信念で、老健らしい看取りに取り組みたいです」

▶もともとは支援相談員が使っていたものを進化させた支援経過記録



ディ・グリューネン流
看取りのポイント

- ☑ 入所段階で全入所者にアドバンス・ケア・プランニングを実施
- ☑ 家族とのやり取りの詳細を記載する「支援経過記録」で情報を共有
- ☑ 家族への情報提供は、職種関わらず気付いた職員が小まめに行う

道老健の 広がるつながる **輪**

～看護介護委員会～

北海道老健協には目的別の委員会が設けられています。今回は、長い歴史がある「看護介護委員会」をご紹介します。



委員長 中村 君代
(なかむら きみよ)

介護老人保健施設
アートライフ恵庭



北畑 良子
(きたはた よしこ)
介護老人保健施設
アメニティ帯広

看護介護 委員会とは？

15年前に看護と介護の質の向上を図ることを目的に発足した、北海道老健協における委員会の一つ。現在、中村君代（アートライフ恵庭）を委員長に、恵庭、札幌、旭川、登別、帯広の老健に所属する7名の看護師で組織しています。

金森 倫代
(かなもり ともよ)
介護老人保健施設
フェニックス



喜島 清美
(きじま きよみ)
介護老人保健施設
おおぞら

何をしているの？

年に1回、老健入職5年以上の中堅職員もしくは管理職を対象にしたリーダー研修を開催しています。2017年から19年の3年間はアンガーマネジメント研修を行い、私たち委員がファシリテーターとなりグループワークを行いました。研修は自施設に帰って伝達研修を行うことを想定し、大事なポイントやプレゼン方法も習得できるような中身を意識しています。来年度もぜひ多くのお参加をお待ちしています！

毛利 幸恵
(もうり さちえ)

介護老人保健施設
グリーンコート三愛



斉藤 久子
(さいとう ひさこ)

介護老人保健施設
コミュニティホーム白石

やりたいことは何ですか？

リーダーの皆さんは、人材教育の難しさや人材不足に悩むことが多いと思います。研修に参加することが、他老健と交流を通じて課題を解決するヒントを得たり、悩みを相談し合えるネットワークを築く機会となればと願っています。また、看護・介護技術を競う老健ならではのコンテストを開催し、それぞれの老健の魅力発掘や、老健で働く人たちのモチベーション向上につなげられるような取り組みができれば…。みなさんと一緒に実現したいですね！



▲アンガーマネジメント研修の様子



▲グループワークも効果的に行われ盛り上がる会場

来年度のリーダー研修にも、多くの会員のみなさんのお参加をお待ちしています！

みんなで目指すのは職員・利用者のハピネス

医療法人社団久仁会 介護老人保健施設 いきいき

「いきいき」は、2019年4月から組織改革に取り組んでいます。大事にしたのは「現場が組織をつくる」こと。全老健が提唱するドーナツ型組織（職域平等型）を基盤とし、いずれも多職種を構成メンバーに、管理部門は外側、内側に現場職員からなる在宅・自立・生活支援課の3部門を設置。そして、中心に掲げた利用者との「ハピネス」を全職員で目指す形です。最高戦略責任者の嵐達也さんは、そのねらいについて「誰かの一言で方針が急が変わってしまう



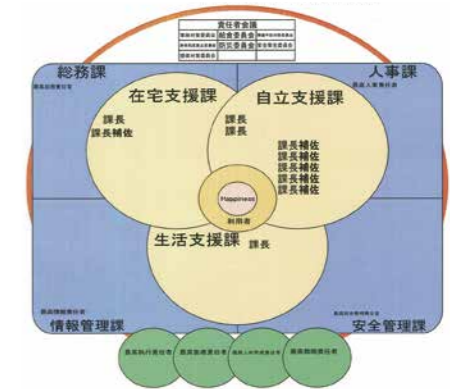
前列左から白川さん、長良さん、宮田さん、田中さん、後列左から松井さん、奈良さん、嵐さん、松本さん

ような権力の集中を取り払いたい、という思いを込めました」と説明。施設長で最高医療責任者の田中昌博さんも、「医師がトップで介護職が下層のピラミッド型ではなく、平均年齢40歳の多職種が活躍する若々しい組織ができつつあります」と話します。

改革の背景にあったのは、老健としてのあるべき姿を追求したいという思い。そのため組織の整備とともに、ほぼ実績のなかった在宅復帰への挑戦も開始しました。短時間リハビリの導入をはじめ、田中施設長も含めた入所前後訪問や病院・居宅介護支援事業所への周知活動を強化。ケアにおいても、最高人材育成責任者の宮田理香さんを主導に看護職と介護職でグループを組み、入所者一人ひとりのニーズに即した看取りや医療重度者の対応にもより一層注力しました。あわせてコストや人材のマネジメントも徹底。「みんなの頑張りを評価につなげ、経営にも貢献できるよう現場と経営のバランスを大事にしました」と最高執行責任者の松本靖夫さん。その結果、取り

組みから1年で超在宅強化型を実現しました。「今のところ新しい組織がうまく機能しています」（松本さん）。

今後について最高経営責任者の白川未緒さんは、「前向きな職員が多いのが当施設の強み。彼らの意欲を引き上げつつ、働きやすい職場を作りたい」と展望します。



議論を重ねて完成した新しい組織図

- 住所／北見市東相内町172-80
- TEL／0157-66-1111
- 入所定員／100名、通所定員／60名



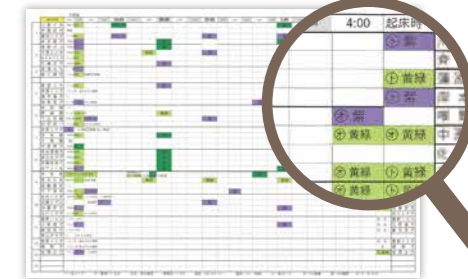
最適な排泄ケアで環境改善とコスト削減を達成

社会福祉法人きたみ北尽会 介護老人保健施設 緑風

「緑風」が2018年夏に実施した排泄ケアの改善の取り組みは、第30回全国老人保健施設記念大会の演題発表にもつながるなど、同施設にとって大きな出来事となりました。中心メンバーは発案者である事務次長の笹谷貴志さん、鎌田知美さんが委員長を務める4名の排泄委員、介護主任の片岡祐二さんです。笹谷さんは、「人手が限られる夜間帯において、3時間ごとのオムツ交換の作業は職員の大きな負担でした。入所者の安眠を妨げる要因にもなっていました。コスト面からもオムツの交換回数を減らす必要があると考えました」と取り組みのきっかけを説明します。

同施設がはじめに着手したのは、4社の製品比較を検討し、吸水性や肌触り等、それまでよりも最適なオムツを導入することでした。各社のサンプルを1週間ずつ1カ月間にわたり、同じ入所者でモニタリングを実施。吸収量や吸収スピードといった9つの項目

において検討を重ね、1社を選定しました。そしてさらに取り掛かったのは、入所者一人ひとりの排泄ケアのパターン分析です。「入所者さんによって異なるオムツの種類や適切な付け方、排泄の意志表示方法等を記録することで、オムツを効果的に使い、快適な排泄につなげるためです」と鎌田さん。排泄委員内で議論を重ね、試行錯誤のうえ全80名の入所者のパターンを作成しました。これにより、オムツ交換の回数・使用量削減による職員負担の軽減や入所者の安眠確保、約



詳細にパターン化した排泄ケア表

2割のコスト削減を実現。「約4時間の作業時間削減につながり、職員の気持ちにゆとりが生まれました」と片岡さん。「人材に限られるなかですが、新しいことに挑戦する良いきっかけになりました」と事務部長の高橋正明さんは振り返ります。「これから地域とも積極的に交わり、利用者と職員にとってより良い老健にしたい」と皆さん口をそろえます。

- 住所／北見市緑ヶ丘3丁目29-8
- TEL／0157-24-2806
- 入所定員／80名、通所定員／40名



前列左から片岡さん、鎌田さん、後列左から高橋さん、笹谷さん

第2回

研修地の魅力探訪

せっかく ですから…

札幌編①

① 大通公園・さっぽろテレビ塔

大通公園は季節ごとに楽しめる催し物が満載で、夏の風物詩はお馴染みの「とうきびワゴン」です。さっぽろテレビ塔では、高さ27mからの『テレビ塔ダイブ』が体験できるってご存知でしたか？



見る

② ノルベサ 観覧車ノリア (nORIA)

すすきののビル屋上に設けられた観覧車。赤いゴンドラの中にひとつだけ黄色いゴンドラがあり、これに乗ると「幸せになれる」「恋が実る」という都市伝説的なものがさやかれています。



③ 豊平峡温泉

日本でも数少ない源泉「100%」がけ流しと、最大入浴人数200人という日本最大級の露天風呂があり、景色も泉質もおすすめ。温泉だけではなく、豊平峡温泉名物インドカレー、十割そば、ジンギスカンも絶品です!!



体験する

④ ノースサファリサッポロ

体験型ふれあい動物園で「日本一危険な動物園」と言われています。動物たちとの距離0m! 貴重な体験ができること間違いなしです。十分お気をつけください…。



研修がてら、その土地の魅力に触れてみませんか。
地元民だからこそ知るおすすめスポットを紹介します。

案内人 平野 信也 (ひらの・しんや)

医療法人秀友会
介護老人保健施設
愛里苑 事務長

16年間の病院勤務を経て老健
は5年目。ゴルフ、スキーバ、
一人旅、温泉巡りに山登りと
多趣味で資格マニア。



生まれは帯広、
青春時代は北見で過ごし、
今の職場は当別町にありますが…
札幌も詳しいです!!
今回は私が行ったことのある
札幌おすすめスポットを
ご紹介したいと思います。

⑤ 札幌ジンギスカンだるま

新鮮なマトン肉と秘伝のタレが絶品。お店に入って席に着いたら、お肉の入ったお皿が一枚出てくるので、初めての方は何も頼んでないのにびっくりするかも？

⑥ パフェ、珈琲、酒、佐藤

お酒を飲んだ後や一日のしめくりにはパフェを味わう、札幌発の食文化「シメパフェ」。プームの火付け役である「佐藤」の計算されつくしたパフェはスイーツ通をうならせます。

食べる



⑦ 名代にぎりめし

24時間営業のススキノの人気おにぎり屋さん。種類が豊富で、注文してから握ってくれるのでいつでも出来たて。夜中でも行列ができる理由がきっとわかります。



札幌市で行われる研修会は
7月6日・7日
ホテルポールスター札幌にて。

2020年東京オリンピックの
マラソン・競歩コースに決定した
「都市と自然が共存する街、札幌」で
行われる研修会に、皆様ぜひ
ご参加下さい!

事務局通信

皆様からのご意見・ご要望お待ちしております!

「老健ほっかいどう」は発刊から4年目を迎えました。編集を担当している身としては、皆さんに有益な情報を提供出来ているのだろうか、興味を持って頂いているのだろうか、そもそも読んで頂いているのだろうか…。いつも不安がよぎる次第です。ぜひ、施設の職員皆さんで読んで頂き、ご感想やご要望を頂ければ幸いです。さて、まだ先の話ではありますが、8月に函館で職員基礎研修会を開催予定です。皆様の参加を心よりお待ちしております。

(介護老人保健施設グランドサン亀田/古川和也)

機関誌「老健ほっかいどう」は、広大な地で活躍している会員の皆さまとの情報共有ツールとして発刊し、会員施設の職員一人ひとりが興味を抱けるような魅力のある機関誌を目指しております。これからも皆様の情報共有の一助となるよう、より一層努力して参ります。また、「ろうけん拝見」のコーナーでは会員施設の皆さまの様々な取り組みを紹介しておりますので、これからもご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(介護老人保健施設とりろ/境利明)